

教団論 — 教理から —

茂田 井 教 亨

(立正大学名誉教授)

教団論というテーマ、これはあまり日蓮宗にはごさいませんけれども、教団論というテーマで考えなければならぬのではないかと、最近、痛感したのでございます。

たまたまキリスト教のものを読んでおりますと、キリスト教には、ご承知の通り、教会論というのがございます。私は、教会と申しますと、十字架のある建物を連想し、教会論などはどういうものでもよいと思つていたのですが、そうではない。教会論は、こちらでいえば、教団論なんです。キリスト教者の考える教会とは、建物でもなく、場所でもなく、キリストの弟子達が信者のために神の福音を伝えるという行為、また行為がなされる場所というように考へているようであります。

私が見たのでは、カール・バルトの教会論、日本のものでは、かつて立正大学で教鞭をとつていられた熊野義孝先生の書物を読みました。熊野先生の教会論などを続きますと、その教会論にはおどろいたのですが、彼らが進んでいるんです。キリスト教学の方が進んでいるということを感じまして、実は内心恥しいと思つたのであります。

ただいま宮崎先生のお話を聞いておりました、日蓮聖人が在世の頃から、宗団と申しますか、団体組織、上層・中層・下層と申しますと言葉がまずいのですが、それぞれの支配者、その中間、支配される被支配といったランクがあつて、一つの教団を組織しておつたということ、日蓮宗の構成をしておつたということでございます。

私が考えるものは、そのような組織ではなくて、もつと宗教教団がいかにあるべきかという理念でありまして、それは、むしろ彼らキリスト教の方が進んでいるのでありまして、このことが、教団論というものを考えてみたいと気持ちよかったです。

私の生活の中には、教団はありませんけれども教団論という理念的なものはない。つまり教団というものは、宗学的自覚があつて、それからの位置付けがあつてはじめて、私達は真の教団人になるのではないかと考えました時に、キリスト教に対する恥しさを感じたのでございます。

余談になりますが、昨日、宗務院に会議がありまして出席したのですが、その会議は、一つ新しい機構が作られる、作らなければどうもまずいということでした。当局に一つのそうした意向が見えてきまして、しかもそれが若い人の中から起きています。老人の方は、いいんじゃないかという意見がありますけれども、若い方々は、これではだめだといったような意識と申しましょうか、自覚が若い人の中に出てきたのではないかと思ふのであります。最近、日蓮宗青年会の人が私のところに来られまして話をするのも、一つの自覚の芽が出てきたように思ふのであります。

これは私の欲目でみたからかもしれないかもしれませんが、そういうことが一つの現象として起きてまいりますと、教団はまさに自覚しなければならぬという時期に到達したと思ふのであります。したがって、ここに教団とはこうあるべきであるということ、過去のことはそれに学ばなければなりません、過去に学びながら、現代の社会、世界状況にあつては、こうしなければならぬという教団の位置付け、あるいは理念付けということが、宗学に携わるわれわれには、一つの課題として要請されているのではないかと思ひまして、今日はこの集会に出たのでございます。

そこで、キリスト教で申しますところの教会がどのように扱われているのかということ、常識的にのぞいたので

すが、バルトだとか、熊野先生方々の考えていることを廻りますと、大体アウグスチヌスに行くんではないかと思うのであります。

聖アウグスチヌスはいつどこから出てきたのかといえますと、同じバイブルの中でもパウロであると思います。有名な彼の言葉に、「もはやわれ生くるにあらず。キリストのわれにおいて生くるなり」というようなことを、彼は言った。これが柱となりまして、パウロの書簡から生まれましたところのアウグスチヌスの考えというものは、つまり人間は神の絶体的恩恵によつて救われるというのが第一番、人間は神の恩寵によつて、絶体的恩寵、恩恵と申しますか、それによつて救われる。そして教会はその救いの唯一の伝達機関である、と。教会というものは神の恩恵を伝える伝達機関である、と。それから、地上の国家、ここはわれわれとしても考えなければならぬのですが、国と法の問題がよく言われますけれども、地上の国家は神の国であるところの教会の精神的な教導を受けるべきである、と主張する。教導とは、教え、先に教え導く、このように申します。こういう、国というよりも法の方が上である、国家といえども神の意志には逆えない、といったようなアウグスチヌスの信仰は、日蓮聖人の安国論に似ているのではないか。

それから私は、アウグスチヌスがおもしろくなりまして、『神の国』を読んだのであります。まさに『神の国』は『安国論』ですね。『立正安国論』をもっとスケールを大きくしたものが『神の国』であるといつてよいと思うのであります。そのようなことを相似点として見てまいりますと、日蓮宗というわれわれの教団は、きわめてキリスト教教団と似た性格をもっているのではないかと私は思つたのであります。

そこで、何といつてもわれわれは仏教徒でありますので、キリスト教と同じになることはあり得ないのでありますから、では、仏教教団の中の日蓮宗はどうなるのであろうか。

清水龍山先生が、真宗の村上專精博士はこういつていると、かつて言われたことがありました。それは、清水先生の『法華經要義』に書かれてあったかと思いますが、村上博士はいままで日蓮は食わず嫌いで、とにかく日蓮というと、念仏無間というから、どうも自分としては読みにくかった。ところが、余暇を利用して日蓮の遺文を通読したと言うんですね。そうすると村上博士は、日蓮という人はなかなかおもしろい人であって、もし日蓮宗がほんとうに成立すると、禅宗も念仏宗も天台も真言もみなつぶれてしまうんだ、そういう宗派である。日蓮宗はたして成立せば、他の宗派はみなつぶれてしまわなければならない、こういうことを知った、と。村上先生は、これは容易な宗派ではない、と考えたのでありましょう。このようなことを書いているのを、清水先生がおもしろいではないか、さすがは村上師はよく読んだといったように記憶しています。

そこで私は、鎌倉の三宗、日蓮宗（法華宗）・浄土宗（真宗も含めて浄土宗といいます）・禅宗となりますが、この浄土宗・禅宗は、教義とか信仰は祖師を離れても成り立つと思うんです。これは本宗と非常に違ったところで、特に禅宗はそうです。禅のごときは、弟子がなくてもかまわない、師がいなくてもかまわないといったような、非常に自由なところに禅の特色があるように思うのであります。

道元は、一箇半箇いつこはんこのために法を説くといっていますけれども、弟子があればあってもいい、なければなくてもいい、ですから、この人が師匠だからこの人の教えをずうっと守っていくんだと、先ほどの宮崎先生のお話を拝聴しております。日蓮に背くものは日蓮の門下でない、日蓮の門流ではないと、日蓮聖人がはっきりと言われること、このようなことは、禅宗にはない。異端・邪説をあげば、それは破門したことになる。邪説をはいた人ははいてもまた自由にはいていける。それは成り立つんだというところに、彼らの宗派の個に立つ、つまり集団でなくて個的であるという性格が禅にある。浄土宗の方はそれほど強くはないように思いますけれど、私達外からみる感じでは、やはり別

に座禅をする、念仏するということは、宗祖から離れても、その気持さえあればどこでもいいんだ。つまり一人となつて念仏ができる、一人となつて座禅ができるというのが、禅・念仏の宗派の個性であろうと、私は思うのであります。

ところが、わが宗はどうであるかというのと、本宗の特色は、宗祖なしには生きてはいかれないのではないかと思うのであります。で、これを寺院の構造からみてもそうでありまして、祖師の像が本堂の真ん中に安置されているのは、どうも日蓮宗系ではないかと思ひます。日蓮正宗は木像はかざらないようですが、宗祖本仏といつて、宗祖がなくしては正宗も成り立たないわけであります。形があるなしは別として、正宗もわれわれも、宗祖なくしては成り立たない。身延山を祖山といつたり、どこの寺へ行きましても、大なり小なり祖師が奉安されています。お参りに来る人は、お祖師さまにお参りに来る。ご本尊が何であれ、祖師にお参りに来て、これをお祖師さまにあげてくださいと供物を持つてくる。そしてわれわれは、それを祖師に捧げます。つまり、宗祖は、いつもわれわれと信者、能化と所化との媒介になっている。私は、これは他宗と違つたところの性格であろうと思ひます。

これは、言葉が妥当であるかどうかわかりませんが、私の一つの思ひ付きでもあり、一つの試みでもありますので、まだ定着した考えではありませんことをご承知おき願ひたいのでありますが、つまり禅・念仏の方は非歴史的宗教であるといつてよいかと思ひます。で、日蓮教団はきわめて歴史的な教団であるところに、区別がつくのではないかと思ひます。つまり、歴史というものが、きわめて一般歴史との関わりが強いのです。不受不施もそうであります。弾圧されるといふ教団であつて、はじめて歴史の中に位置付けられるわけであります。でありますから、たとえ受派であろうと、不受派であろうと、必ず大なり小なり歴史と関わりを持つてゐるということがあります。

ところが、禪・念仏というものは歴史に関わりがない。どんな時でも座禪をし、どんな時でも念仏はいえる。そこに本宗と他宗の相違がある。そこに日蓮教団の特色があり、そこにまた、われわれは、今後活動すべき大変広い舞台があるんだと思うんです。それがまた日蓮宗の弱点となつてゐることを、われわれは考えなければならぬと思うのであります。

教団論をみる場合、必ず日蓮宗の弱点が出てきますから、私は、それは反省しなければならぬかと思ひます。その歴史的な教団である、歴史的宗教としての性格をもつた教団であるということは、歴史というものと密接な関係をもつてゐることであります。したがつて、宗祖を祖師とする本宗は、常に歴史的な自覚と歴史的な行動が要請される。となりますと、教団としての位置付けとか、教団とは何であるかということを、われわれは自覚しなければいけない。教団的自覚なくしてやたらに動くということは、ちょうど羅針盤なくして航海するのと同じ。どこへ行つてしまふかわからなくなる。

そこで、教団を自覚する教義的根底はどこにあるのだろうか。今日の二十世紀とか二十一世紀の現代社会、歴史的な世界的な時代の中には、教団がどうあるかを考える前に、われわれはもう一遍遡つて、宗祖から発生したところの教団の根本的な立場に一遍帰つてみて考える必要があると思うのであります。

で、それは御書で申しますと、『開目抄』『報恩抄』『本尊抄』にそれが窺えると思ひます。『開目抄』は、ご承知の通りいろいろなことが述べられておりまして、ちよつと捉えにくいのであります。『本尊抄』には、割合に宗祖はまとまつて書いていらつしやいますので、『本尊抄』で私は見てまいりますと、定本遺文(昭和定本日蓮聖人遺文)では七一六頁ですが、「問て曰く、此経文の遣使遺告は如何……」、これを私は第七章としたのであります。第七章の第一節に四種の四依が述べられています。ここに私は、末法の依師というものを、ここで宗祖は、宗学用語で申しま

すれば、起・顕・竟という立場から書いておられると思えるのであります。

起・顕・竟という言葉は、『御義口伝』に出てまいります。『御義口伝』は文献学的には大変問題があるうと思ひますので、宗祖のお使いになつた言葉とはいえないのでありますけれども、幸いに『新尼御前御返事』（八六七頁）の中に起・顕・極ということをおっしゃっているが、少し語呂が悪いから、私は、『御義口伝』に使われている言葉をそのまま使ひまして宗学上のテクニカルチームとしたらどうかと思つて使つています。起きて、顕おわられて、竟おるといつた方がよろしいかと思つて使つておりますが、これは言うまでもなく、皆さんご承知の通り、法師・宝塔にこと起おると『御義口伝』におっしゃっています。

法華経は序品第一から人記品第九に至るまでを在世の法華経、法師品第十からはまさに滅後のためにお説きになつた。要するに、釈尊のまなざしは末代われわれの上に注がれているというように、私には取れるのです。第九章までは、弟子達阿難や目連などを対象に語り、第十章にきますと、はるか末法の方を指す意味で、下機の衆生に特にお語りになつてゐると思えるのです。

そこで、法師品以下は、釈尊が自分に語つておられると思うとありがたいのですが、法師品には、「況滅度後」とありまして、末法滅後に法華経を弘めるものは如来の使いとし、如来の事を行ずる者ということをおっしゃつてゐる。

で、それから宝塔品にいきまして、多宝如来の宝塔が涌出し、そして条件が備わつて宝塔が開かれて、釈尊と多宝如来とがお並びになりました時に、一体どんなことが起きたかというところ、「以大音声 普告四衆」というあの言葉です。「大音声を以て普く四衆に告げたまはく」という釈尊のお言葉、まさに時が来たところ、「如来久しからずして当に涅槃に入るべし。仏、此の妙法華経を以て付嘱して在ることあらしめんと欲す」とおっしゃつた、あの第一の大音声、

偽文で繰り返し返されて、宗祖はこれを三箇の勅宣とおっしゃっていますが、あそこへ来まして天台大師の解釈では、「玄題をあげて付嘱するに、声、下方に徹す」という注釈でございますね。

その前に天台大師は、宝塔に二つの宝塔があつて、開かれない時の宝塔、まだ多宝如来が姿をお示しにならない時の宝塔は、証前の宝塔で、迹門を証明しているんだと、それから分身仏が集集されて、三変土田されて、諸仏が集集されて、宝塔が開かれて釈尊がお入りになってからの開戸された宝塔は、起後の宝塔であるといっておられます。証前とは、前を証する、すなわち迹門を証明するところの宝塔、「善哉善哉、釈迦牟尼世尊……皆是真实なり」という、あの証明は、三周の説法を証明している。声ではなく、姿を見せてからの宝塔は、起後の宝塔である、と天台は解釈する。起後ということが、後とは本門でありますから、本門が起きるということは、いよいよ日蓮聖人の舞台になるということになります。

宝塔品の「以大音声 普告四衆」以下というものは、六難九易に至るまですべて地涌の菩薩を対象にされていることとなります。涌出品第十五に来ると、地涌の菩薩をして釈尊は、「我が娑婆世界に自から六万恒河沙等の菩薩摩訶薩あり」とおっしゃっている。娑婆世界には一人でない。六万恒河沙の菩薩が出、その菩薩等にまた六万恒河沙の眷属が付いている。とにかく上行・無辺行・浄行・安立行が頂点に立ち、多くの菩薩がいる。これはまさに法華教団だと思ふのであります。その教団を組織するところの六万恒河沙の菩薩というのは、四菩薩をヘッドとした、教団としての組織をたてています。しかしその教団は、活動というものは非常に困難である。難信難解・六難九易であると説かれたのが、宝塔品であつて、また勸持品でもあります。

で、それを、宗祖は自らご自身でそのまま色読されたんです。これは、宗祖だけが色読されていいものであるかという、私はそうでないと思うんです。六万恒河沙の菩薩が皆色読しなければならぬ。けれども、では、日蓮聖人

のようにして牢にぶちこまれてみるなどということは、今はできないのですが、とにかく、多少なりとも苦というものをなめなければ、宗門はいけない。割に楽々と行をしていたのでは、本化の教団にはならないのではないかと、私は思うのであります。

私は、八年間というものの堀の内妙法寺に入りましたが、いまいる寺よりも楽でした。それで、よくご遺文が読めました。読む中に、宗祖がおっしゃった言葉に、「凡夫は志しと申す文字を心へて仏になり候なり」とあります。志がないと仏にはなれないぞ、とおっしゃっている。その志とは何であるかというところ、志とは観心なりとおっしゃっている。「観心の法門少少之を注す」とおっしゃった『本尊抄』も志がなければわからない。ですから、無二の志をみて開拓せられるべきかと言う。単なる志でなくて、あれは、観心は志とつながるんだ。興味があつて、拝見したいから見るのではなく、観心の世界は志です。志というものは、瞬間的なものではなく、時間的であつて、永続的なものである。その中に、私は観心というものがあると思います。

このように宗祖はお示しになつたとすると、志というものは、私は、「難」であると思います。つまり六難九易の「難」であります。六難九易・此経難持・難信難解と、とにかく「難」ということが出てくるお経文であります。題目を唱えるにも、お経をあげるにも、とくに「難」がある。

堀の内妙法寺では、朝四時半起床、五時昇堂、これはつらく、年寄りのくせに眠くなるが、やろうと思えば、楽ではないができる。導師の私が遅刻すると朝勤ができない。病気でない限り、幸い休むことなく、八年勤めることができました。これはそれ程苦しいとは思いません。けれども志を続けるということは難しい。

まず、私はいまの自分の生活の変化というものを考えてみますと、いまのままですと、志はずっと続きます。しかし八年が過ぎてもとの八王子の書齋にもどると、いまの志が崩れるという危惧があります。けれども、それをしくじ

ってしまったならば、私はやはりだめなんだ、仏にはなれないんだ、と思うのであります。と申しますのは、私は、昭和三十五年から三年間、布教研修所に講師として入り、研修生達と過ごしたんです。布教研修生達が私を鞭撻してくれて、私は三年間いました。これは大変よいことだからと思ひ、寺へ帰ってもこれをやらなければいけないと思つて帰つたが、一週間たつとだめなんです。そこで自分はだめだなあと思ひました。

八年前に堀の内妙法寺に来た時は、今度は続けなければいけないということで、研修のつもりでやつてきました。ここでまた研修所から帰つた時になつたら、私はだめな人間だと実は思つて居るのですが、私は、宗祖がおつしやつた、志は観心だ、観心が志だという言葉を書右の銘としてきました。

志を続けることは、実は「難」なんです。くじけてはいけない、続けなければいけない。そこに私は、難信難解とはこのことだと思つたのであります。首の座にすわることは苦しいことですから、大聖人がなされたような苦難の体験をまねしようとも、今日の時勢からはあのようにはいかないと思ひます。そこで、外部の迫害でなくて、内部の迫害、内部の葛藤、心の中に起きてくるところの、内心を脅かすものに対して克服していかなければいけない。天台大師の言葉を借りれば、三障四魔、この三障四魔に打ち勝つことが、私は、志であり、難信難解の「難」があると思ひます。そしてそこに宗祖と系譜を同じくするところの信仰の系図があるのではないかと思ひます。このことが、まず、教団のバックボーンにならなければいけない。

そして、宗祖は教主釈尊とつながっていますから、教主釈尊がつまり師僧としての宗祖をお遣わしになつた。キリスト教の言葉を借りれば、ヨハネなりを遣わしたという意味におきまして、教主釈尊は上行菩薩を派遣された。その釈尊の使い、遣使還告の使いとしての宗祖にわれわれは仕えるところの地涌の一人ということにして、先ほど申しましたことを考えますと、ここに二つの教団、二つの関係が成り立つ。

そうしますと、われわれ宗祖の下にいる者は、六万恒河沙の一人か、六万恒河沙の眷属の六万恒河沙の中の一人になるか、あるいはその中の三人、二人、一人か、あるいはただ一人の眷属もいないそれになるか、それ以外はないんですから、他の眷属であつても、私は教団の一人という横の關係に位置付けられると思うのであります。そこに私どもは、教典の肉体化ということが言えるのではないか、つまり法華經というものは、大聖人の法華經というのは、ただ文字ばかりではなくして、法華經が自らになる、自らが法華經になるといつた關係合いで位置付けられると同時に、信仰的認識の中にすわるのではないかと思うのであります。

と申しますことは、「山中の日蓮」というべきところ、「山中の法華經」に送られたというふうにお手紙にお書きになりますね。あそこは、何ともいえない妙味だといえます。山中の日蓮をあわれとおぼしめして、というところもあります。「釈迦仏の御命をもたすけまいらせ候ぬる」とありますね。釈迦仏は絶対の変化のない、無始無終の仏様ですから、釈迦仏の命はなくなることはないのですが、大聖人の釈迦仏は、釈迦仏の命をもつなぐともおっしゃって、釈迦仏が亡くなるというふうにもみられています。そこが、私、ありがたいと思う。觀念的に仏というものを、ただとらえてしまつては、無始無終だからといってしまつたのでは、仏様がないと同じだと思う。現有滅不滅とおっしゃつてゐる。滅不滅であるから、仏様は尊いのであります。日蓮聖人も食べなければ飢え死にしまわれるから、私は尊いと思つてゐるんです。そこを檀信徒が布施をなさる。それを感謝されて、法華經を助けられるかと感謝されるのは、とにかくありがたい境地だと思ふんです。

で、そういう信仰で固つた教団で、それを釈尊の声として法華經の教えとして世界に弘めていく、世界にそれを布教していくというところに、教団というものがもう一遍新たな教団として、不受不施などいろいろな問題がありましたけれども、これはやはり日本の社会の狭かつた、小さな社会においての葛藤でありましたから、それをさらに超え

て世界の宗教として教団は発展していかなければならない、とこのように私は思うのでございます。

それにつきまして、私どもは、一つの信仰というものを、もう一遍、自分の信仰というものを洗い直して見る必要があるんじゃないか。

日蓮宗の教団人としての信仰といたしましては、私は、三通りの段階があると思うのです。それは先にふれました起・顕・竟なのでありますが、最初は応声おうしやうの信、次が聞命の信、最後が発誓の信、これはみな私の造語ですが、応声の信というのは、大音声をもって釈尊が下方空中住の菩薩におっしゃる。しかしおっしゃっているのは靈山虚空會上の四衆のまえておっしゃっているんですが、内心は下方空中住の菩薩におっしゃっていることになりますので、その声が下方に徹した。その下方におります虚空中住の、つまり本化の菩薩は、あの釈尊の大音声を耳にされて、その声に応ずる用意をなされるわけです。そこに、われわれの信仰の発端がある。ただお経を読んでありがたいというだけじゃなくて、まず仏の声を聞いて、「以大音声 普告四衆」と読んだ時に、おれはそこにいるぞ、というふうに受けとめなければならぬと思うのであります。

そして第十五章へきまして、「止善男子 不須汝等 護持此經」と、汝達は此の經を護持すること須もちいないと仰せられ、我に自ら六万恒河沙の菩薩ありと仰せられてお出ましになられましょう。それを聞命発来と天台が言った。命を聞く、釈尊のご命令を聞いて出てくることを、聞命発来と天台は釈しています。ですから私は聞命発来の信と言うんです。命令を受けたのですから、かしこまって出なければならぬ。命令を受けた以上は、釈尊の要請に応えなければならぬ。いままでは隠れていましたけれど、釈尊の目の前に出て釈尊の命令を承わるのですから、その次の段階に入りますと、聞命の信となります。

神力品にきまして、「我等亦自 欲得是真浄大法」と、そこで天台も、下方の発誓のみをみるといっています。下方

の発誓のみをみるとは、やはり天台はえらいと思いますね。他の人は発誓しません。上行等の千世界微塵等の菩薩摩訶薩の涌出せる者が、「我等亦自……」と言ったんですから、そこには他の者は入っていない。そこで天台は下方の発誓のみといい、発誓というのは誓いを発することですから、今度退転せじと願じられるのは、そこなんでしょうね。それがなければ、日蓮教団はないと同じなんです。

発誓しなければだめなんです。誓いを発しなければ。そこで誓いを発するシーンが最後になる。応声・聞命・発誓の三段階に分かれて法華経では、地涌の菩薩の信仰の動き具合、ちょうど胎児が母体の中で成長するように、信仰というものはだんだんほんものになっていき、そして生まれた時には、発誓して生まれる。その誓いを発して生まれるんですから、はじめてそこに一つの教団というものが出てくるのです。そうしませんと、いたずらに教団には何の会や研究所があるという屋上屋を作るといふ疑問が出るわけなんです。

とにかく、私どもの法華経の信というものは、他宗とは異なったところの、宗祖を汲まなければ、ほんとうの信仰というものは出てこないという特殊性があること。道元もいらない、親鸞もいらない、一人で座禅する、一人で念仏する、それでいいんです、むこうは。

われわれは、日蓮はいらないんだ、日朗も日興もいらないんだ、自分一人でいいんだと思って、ただ法華教団をやっている、新興教団には、そういうような傾向があるでしょう。ですから、そういうものに対しては、われわれとしては、どうあるべきかということ、これからの問題となると思うんです。何でもいいわでは、お題目を唱えているんだから何でもいいわということになるのでは、やはり味噌も糞も一つになったようなことになって、ほんとうの日蓮教団ではない。そこで、日蓮教団とは何であるかということをやるのが、私は宗学の役目であろうと思うのであります。

私は、これは一つの問題提起として申しあげる段階でありまして、自分自身がまだはつきり固まっておりますので、甚だまとまりのないことを申しあげましたが、近頃、私はこのようなことを考えている次第であります。

以上の宮崎・茂田井両先生の論述二篇は、昭和五十九年五月十日、日蓮宗現代宗教研究所主催「研究講座・第四回教化研究集会」で発表されたものです。「茂田井・宮崎両先生に聞く―教団論・日蓮宗を考える―」と題して、日蓮宗はいかにあるべきか、日蓮宗の歴史的伝統と使命を現代にいかにか蘇生させるべきか、日蓮宗は今のままでよいのか、そもそも教団とは何か等々を、宮崎先生は歴史から、茂田井先生には教理からそれぞれ述べてもらいました。